

一九六〇年代、世界的なブームを巻き起こした「ミニスカート」。その立役者となったデザイナー、マリリー・クワントの回顧展が渋谷で十一月二十六日に開幕する。

今回展示されるのは、クワントが一九五五〜七五年に手掛けた約一〇〇点の衣服。その一部は「イギリス全土からSNSで募ったもの」だと、展覧会の翻訳監修を務めた服飾史家・中野香織氏は語る。

「ごく一般の方が『新婚旅行で着ました』など、当時の思い出と共に提供してくださったそうです。マリリー・クワントを一言で表せば

「私たちの、ブランド、シビアな階級社会であるイギリスで、選ばれし人のものだったファッションの門戸を開き、民主化したデザイナーです。それも出発点は社会への怒りではなく、『若さを思いきり謳歌できる服を着たい』というフレッシュな感覚。ひたすら楽しんで生み出した自分のための服が、社会をも変えてしまったのです」

ミニスカブームは海を越え、日本でも六五年以降、爆発的にヒットした。京都女子大学家政学部の成実弘至教授は「イギリス発の若者文化が、結果として多くの国、幅広い世代の女性に、意識革命をもたらした」と評する。

「当時は振り返った日本の新聞記事で、農家に嫁いだ女性が『ミニスカートをはくことで、閉鎖的な家庭から社会の一大ムーブメント



膝上15センチの革命

当時の衣服や写真等が語る「熱狂的ブーム」



《ベストとショートパンツのアンサンブルを着るツイッギー》1966年  
© Photograph Terence Donovan, courtesy Terence Donovan Archive, The Sunday Times, 23 October 1966



《マリー・クワントのブティック「バザー」のショッパーを持つモデル》1959年  
Image courtesy of Mary Quant Archive / Victoria and Albert Museum, London

の中へと踏み出せた」と語っておられた。若者にとってはお洒落で軽快なスタイル、母親など上の世代にとっては、解放、や、社会参加を象徴していたのでしよう。現代へと至る価値転換を後押ししたクワントは、二十世紀ファッションの革新者と言えます」（同前）

ミニの女王がもたらしたビッグな旋風は、今なお息づいている。

「マリー・クワント展」は来年一月二十九日まで渋谷のBunkamura ザ・ミュージアムで開催。当日券は一般一七〇〇円



**CATCH UP**

1967年、新作発表会でモデルの脚を掲げるマリー・クワント。自身もミニスカ姿／写真提供 ゲッティ